

# 仏教讃歌の合唱指導について

## ～視覚・聴覚を通して～

About chorus instruction of Buddhist hymns  
～Through sight and hearing～

ガハプカ 奈美

### はじめに

人と人との関わりが薄れ、コミュニケーション能力の低下やコミュニケーションの不足が言われて久しい。一方で教育の現場においてはグローバル化や人工知能・AIなどの技術革新が急速に進む中、予測困難な未来に備え、子どもの学びを進化させ「生きる力」を育むために学習指導要領の改訂がおおよそ10年ぶりになされた。2020年度より小学校から順に実施が進んできた。中でも「プログラミング教育」や小学校中学年から導入される「外国語教育」に関して現場ではいかにそれらを「生きる力」へとつなげていくか試行錯誤を重ねられている。

その一端として、学校教育の中でICT教材を使用した画期的な授業展開も見られるようになった。一方でインターネット、携帯電話を通じて間違ったコミュニケーションが図られ始め、犯罪へ発展したり、子どもたちが犯罪に巻き込まれたりしてしまうようなこともある。

そんな中、世界中が未曾有の困難な状況に立たされているコロナ禍にあって、教育の現場では様々な検討をしつつその学修効果についても研究が進んできている。その一端として、メディアの果たしてきた役割についてNHK放送研究所は以下のように「教授活動のための道具や環境としてのメディア」から「学習活動のための道具や環境としてのメディア」へ、さらに「自律的な学びへ向けた学習環境としてのメディア」へと位置づけを変えてきた<sup>1)</sup>と整理している。このことは、文部科学省で2020年に検討され挙げられた今後の課題に、平成15

年度の『視聴覚教育メディア研修カリキュラムの標準案』を基にして、新たな「標準」を策定して行く過程、および、調査研究の結果を得た後にも、解決されるべき幾つかの課題がある<sup>2)</sup>としながらもここ数年間で様々な方法を使用した学修のあり方の研究が加速した。

京都女子大学では、親鸞聖人の体せられた仏教精神を教育の中心として、心の学園の実現—建学の精神を第一の基本理念に掲げ、1回生と3回生に「仏教学」をしっかりと学ぶ。また花祭りや報恩講、そして降誕会などでは大学だけではなく学園全体でふれあいを大切にされ実行されている。

筆者はこれまで花祭りや降誕会で、発達教育学部教育学科音楽教育学専攻の学生が最も得意とする“音楽”を通じて建学の精神を感じられるよう、「仏教讃歌」を必ず歌唱するようになってきた。

しかし、2020年度及び2021年度は新型コロナウイルス感染症のまん延を防止のために各部署で様々な検討が行われ、これまで重ねてきたような音楽を用いた行事は中止となったため、筆者は、学生らに音楽を通じて建学の精神が感じられるような活動は出来ないか検討をした。その中で、前掲のような国立教育政策研究所からの報告文を受け、これまで花祭りや降誕会で日本文化と共に発展してきている仏教を背景に持つ楽曲を学生たちと共に歌唱を通じて大切に受け継いできたことをコロナ禍を理由にしてやめてはいけないと考え、これまでとは違った方法でのアプローチの検討を行うこととした。

そこで「合唱1」の履修生の多くが将来、教員を目指すことから、国立教育政策研究所教育課程研究センター報告書音楽（平成20年10月～平成21年2月～小学校第6学年、中学校第3学年）<sup>3)</sup>の中で指摘される、問題点について歌唱からのアプローチで出来る事を模索した。

報告文には、基礎的・基本的な知識等、感じ取って工夫する力、音楽表現の技能、鑑賞する力ペーパーテスト、実技調査及び質問紙調査を用い調査しさらに、その際授業内容の問題点として、現在の日本では、西洋音楽の指導が中心となっており、雅楽に使用される楽器の演奏や三味線、箏など日本の伝統音楽

に対する一般的指導が小学校教諭や中学校音楽教諭にとって（特に小学校教諭にとっては）難しさを感じるところがあることが言われている。（調査結果 [平成22年7月]、集計結果 [平成22年7月] より）それに対する解決方法の提案として、仏教讃歌を通して日本の心を伝える。例えば、そこで新たな試みとして、詩そのものに仏教精神を含む仏教讃歌を通して、現在の問題点に対する解決の一方法として提案出来ないか検討を重ねた。

本来ならば、対面での授業で歌唱し、一つひとつ確認をしながら進めていく事項ではあるが、コロナ禍という事で、歌唱せずとも学ぶことが可能である以下のような方法を取ることにした。

①歌詞を読み取る力、②楽譜を正確に読み取る力、③楽譜を表現（歌唱）する力をつけることを本課題の3つの大きな目的として行った。

このような背景のもと、音楽教育学専攻専門科目である「合唱1」の授業で行った内容の実践について以下報告する。

本論文では、仏教讃歌を教材とすることにより、今後困難の状況にあっても自分を見失うことなく生きていく力をいかにつけていけるかを歌詞の学びと仲間と歌唱することで得られる学びとを明らかにし、仏教讃歌の教材化を目指す過程を述べる。

本論の目的は、人と人とのコミュニケーションが困難な社会であるからこそ、宗教と教育<sup>4)</sup>を関わらせて検討し、よりその人らしい表現方法で仏教讃歌を歌唱—合唱する奏法を探ることにある。

## 1. 研究内容について

### (1) 研究の目的

仏教讃歌がどのような歴史を刻んできたかを学び、花祭りや降誕会が何かについて深め、また、これまで歌唱してきたような一般の合唱曲と仏教讃歌との違いを知り、自分なりに楽曲への向き合い方を考えながら歌唱に活かすことが

出来ることを追究する。

## (2) 研究の方法

①経過観察期間:2021年4月から7月(前期授業)「合唱1」の授業第1回(初回)から第15回(発表会)の15回授業とする。本授業は、音楽教育学専攻の卒業要件科目であり、教職免許状必須科目でもある。

②対象:音楽教育学専攻及び教育学科の音楽(中学校・高等学校)教諭免許状希望者であるが、今回の履修者は音楽教育学専攻の学生1年生30名および本専攻への編入学生2名の合計32名の履修であったため、この32名を対象者とする。

③授業内容:当初シラバスでは、すべての授業で対面授業を計画していたため、予定していたまま実施は不可能であったが、(表1左)様々な方法を駆使して出来る限り深く学ぶことが出来るようなプログラムへ変更をした。(表1右)なおここでは、各回の概要ではなく、本論に関係している部分のみの内容を示す。

【表1】授業計画の変更

	変更前	変更後
「仏教」を背景に持つ合唱曲を学ぶための内容	<ul style="list-style-type: none"><li>・様々な合唱曲を<u>実際に歌唱しながら</u>「合唱」とは何かを考える。</li><li>・合唱の歴史を<u>実際に歌唱しながら</u>迎える。</li><li>・降誕会で<u>仏教讃歌を演奏発表する</u>。(5月21日)</li></ul>	感染防止対策として、配布資料をなくすため、受講生は自身のPCを持参し、事前アップされた教材及び資料を見ながら、音源などを聴いて「合唱」について考える。合唱の歴史について様々な映像や音源を通して学び、時代に合わせた楽曲や宗教を背景に持つ楽曲を学ぶ。

上記表1のように、本来合唱は実際に声を合わせてこそ感じられる感覚が大切であるが、コロナ禍の中で出来得ることへと内容変更を行った。

## (3) 授業のねらい

まず、本授業のねらいは、学園全体の大切な行事である「降誕会」に向けて

仏教のマインドを含む楽曲を通して、降誕会や仏教行事に興味をもち、音楽を通してより深く理解することである。

第5回目の授業では、5月21日(金)開催予定であった降誕会で発表を予定していた楽曲は以下の2曲で、いずれも仏教の要素を強く含んだ楽曲を選曲した。1曲目は、《花は嘆かず》から 4. もう人間はひとりぼっちではない 作詞：坂村 真民 作曲：徳永 洋明、2曲目は、仏教讃歌《春の仏》 作詞：城左門 作曲：中田 喜直の2曲である。

#### 選曲理由

一般合唱曲の選曲理由：《花は嘆かず》から4. もう人間はひとりぼっちではないは、「仏教」や「仏」という言葉が直接用いられていないが、仏教詩人である坂村によって、その詩の中に、まさにコロナ禍で人と人の関わりが希薄になっている「今」だからこそ生きていく力、自分という人間の心の中を知り、力強く生きようとするメッセージを感じてほしいという想いから選曲した。

仏教讃歌の選曲理由：音楽教育学専攻の学生たちの中には、仏教に触れるのが初めての学生も居る事、普段クラシック音楽に触れていると、楽曲の背景には仏教以外の宗教の感覚が入り込んでいるためそれが「音楽」であるとの思い込みにも気づくことが大切だと感じている。また、「声楽」の授業で日本歌曲を歌唱する際、本論で取りあげる《春の仏》の作曲者である、中田喜直の楽曲に必ず触れるため、大変身近な作曲家であると考えた。

## 2. 〈もう人間はひとりぼっちではない〉について

### (1) 作詞者と作曲者について

本楽曲は、仏教詩人である坂村真民（さかむらしんみん、1909-2006）の詩に作曲家徳永洋明（とくながひろあき、1973-）が女声合唱のために作曲したものである。

作曲者の徳永は、作曲・編曲者、指揮者、ピアニストと幅広く活動している。

中でも作曲作品は管弦楽曲から室内楽、独奏曲、歌曲、合唱曲、ミュージカルから放送音楽まで多岐に渡っており、コンクールの課題曲として採用されるほか再演も数多い。一方アレンジャー、指揮者、ピアニストとしても数多くの録音、放送、舞台に参加しており、その卓越した技巧とジャンルを超えた音楽性は、多くの音楽家より篤い信頼を得ている。

作詞者坂村は、熊本県玉名郡府本村（現・荒尾市）の生まれで、大学卒業後、熊本で教員となる。その後、朝鮮に渡って師範学校の教師になったが、終戦後は朝鮮から引き揚げて愛媛県に移住した。高校の教員として国語を教えていた。20歳から短歌に精進していたが、41歳で詩に転じ、個人詩誌『詩国』を発行し続けた。仏教伝道文化賞、愛媛県功労賞、熊本県近代文化功労者賞を受賞している。一遍上人を敬愛し、午前零時に起床して夜明けに重信川のほとりで地球に祈りを捧げる生活、そこから生まれた人生の真理、宇宙の真理を紡ぐ言葉は、弱者に寄り添い、癒しと勇気を与えるもので、老若男女幅広いファン層を持つ詩人である。

坂村の自選詩集<sup>5)</sup>からいくつか合唱曲等に使用されている詩を以下に紹介する。

念ずれば花ひらく

念ずれば

花ひらく

苦しいとき

母がいつも口にしていた

このことばを

私もいつのころからか

となえるようになった

そうしてそのたび

わたしの花がふしぎと  
ひとつひとつ  
ひらいていつた

この詩はどのような時も私は「私」と共にあり、念じ続ければ（自分らしく努力し続ければ）必ずその道は開かれるというようにも読み取れる力強い詩である。

坂村の詩は他にも合唱曲の歌詞として使用されているが、本学では、合唱曲《二度とない人生だから》が最も縁のある詩であろう。

### 二度とない人生だから

二度とない人生だから  
一輪の花にも 無限の愛をそそいでゆこう  
一羽の鳥の声にも 無心の耳をかたむけてゆこう  
二度とない人生だから  
一匹のおおろぎでも ふみころさないようにこころしてゆこう  
どんなにかよろこぶことだろう

### 二度とない人生だから

一ぺんでも多く便りをしよう  
返事はかならず 書くことにしよう

### 二度とない人生だから

まず一番身近な者たちに できるだけのことをしよう  
貧しいけれど こころ豊かに接してゆこう

### 二度とない人生だから

つゆくさのつゆにも めぐりあいのふしぎを思い  
足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから  
のぼる日しづむ日 まるい月かけてゆく月  
四季それぞれの星々の光にふれて  
わがこころをあらいきよめてゆこう

二度とない人生だから  
戦争のない世の 実現に努力し  
そういう詩を 一編でも多く作ってゆこう  
わたしが死んだら  
あとをついでくれる 若い人たちのために  
この大願を 書きつづけてゆこう

また、次の詩は楽曲にはなっていないが、坂村が生前どのような思いで活動をしてきたのかが良くわかる。全身関節炎で何十年も寝たきり、医者も自分さえも自分を見捨てていた清家直子さんとの出会いで、

“なにかわたしにでも  
できることはないか”  
みんながそう考えたら  
きつと何かが与えられ  
必ずひろい世界がひらけてくる  
年中光の射さない部屋に  
(中略)  
どんな小さなことでもいい  
“なにかじぶんにでも  
できることはないか”と  
一億の人がみなそう考え



十億の人がみなそう思い奉仕をしたら  
地球はもつともつと美しくなるだろう  
片隅に光る清家直子さん！

と記し、一人ひとりの想いや力は小さくともみんなが同じく思いやりを持ち動こうとするならば、地球そのものももっと美しくなるであろう。という現在の地球温暖化など留めることの出来ない現代人への問題提起とも思える詩も残している。

このように、坂村は仏教徒でなくともわかるような言葉を使って、人としていかに生きるかを常に考え言葉に残してきた。

坂村はまさに、生涯を通して「人は何に命を懸けるか。自分は人々の心に光を灯す詩を書くことに一生を捧げる」との一念を貫き、老年を迎えてもなお、午前零時に起床、詩を書き続ける生活を続けた。詩業一筋、祈りを込めて紡がれた詩篇は、心に深く沁み入るようである。昭和41年の刊行時、森信三師は、「ホンツイタ コレデニホンガ スクワレル モリ」<sup>6)</sup>と電報を打ったくらいその詩に描かれる世界に今我々が大切にせねばならない真心が表れているようである。

今回歌う楽曲はこのような歌詞一言葉の力によって、歌っている者たちにも聴いている者にも生きる勇気が湧いてくるような曲に仕上がっている。

## (2) 歌詞と合唱曲の構成

授業では、以下のようなワークを学生が各自進めることで理解を深めることにした。

【ワーク1】のように左側には歌詞を右側には合唱の構成がどのように進行しているかを記入するようにして、一目でどのような構成になっているかを見ることが出来るようにした。

《もう人間はひとりぼっちではない》歌詞と合唱の構成	
<b>＝歌詞</b> ①涙にぬれた顔をふこう ②悲しみにぬれた頬をぬくおう ③不幸にぬれた手を洗おう ④ひとりでもいつまでも苦しむことをやめよう ⑤みぎにもひだりにも ⑥友がいる ⑦ま月にもうしろにも ⑧友がいる ⑨ひとりでもいつか時代はすぎ去った ⑩結びあおう ⑪手を取りあおう ⑫どんな時でもひとりでも泣くのをやめよう ⑬もう人間はひとりぼっちでないのだ ⑭どんな時でもひとりでも泣くのをやめよう ⑮もう人間はひとりぼっちでないのだから Ah-	<b>楽曲との関係</b> ①ユニゾン ②ユニゾン ③2部合唱（1拍遅れソプラノ⇒アルト） ④2部合唱（2拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑤【転調】2部合唱 ⑥ほぼユニゾン ⑦2部合唱 ⑧2部合唱 ⑨2部合唱（2拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑩2部合唱（3拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑪2部合唱（3拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑫2部合唱（4拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑬2部合唱 ⑭2部合唱（3拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑮2部合唱（4拍遅れソプラノ⇒アルト） ⑯2部合唱 ⑰2部合唱（1拍遅れソプラノ⇒アルト） 2部⇒3部合唱

### 【ワーク 1】 歌詞と合唱の構成ワークシート

ユニゾン…音楽においてテクスチャを形成する方式の一つであり、同一の旋律を同一の音高で響かせることを言う。

転調…楽曲の途中で調が変わる事。転調には、調の変化が一時的なものとも長い間続くものがある。本楽曲は後者。

### （3）楽曲分析

言語：日本語

形態：女声 2 部合唱（ソプラノ・アルト）最終音で 3 部合唱

速度：Moderato=80

拍子：4 / 4 拍子

調性：G-dur（ト長調）20小節まで ⇒ C-dur（ハ長調）21小節から終曲

【ワーク 1】 からわかるように、楽曲を大きく分けると、ユニゾン部分と 2 部合唱の部分に分けられ、2 部合唱の部分はさらに、ソプラノからアルトへ引き継がれる手法で 1 拍、2 拍、3 拍、4 拍それぞれ遅れて歌唱される部分に分けることが出来る。（以下○内の番号は【ワーク 1】歌詞に付した番号による）

まず、楽曲内でユニゾンを使用している個所は以下の 3 か所にある。

① 涙にぬれた顔をふこう

② 悲しみにぬれた瞳をぬぐおう

⑥ 友がいる

ソプラノ・アルトの2部合唱は以下の5か所にある。

⑤ みぎにもひだりにも

⑦ まえにもうしろにも

⑧ 友がいる

⑪ 手を取りあおう

⑭ どんな時でもひとりで泣くのをやめよう

1拍遅れは以下の2か所にある。

③ 不幸にぬれた手を洗おう

⑮ もう人間はひとりぼっちでないのだから（楽曲最終盤）

2拍遅れは以下の2か所にある。

④ ひとりでいつまでも苦しむことをやめよう

⑨ ひとりでなげく時代はすぎ去った

3拍遅れは以下の2か所にある。

⑩ 結びあおう

⑫ どんな時でもひとりで泣くのをやめよう

4拍遅れは以下の1か所にある。

⑬ もう人間はひとりぼっちでないのだ

主和音を使った力強い前奏を4小節聴いたのちすぐに①、②の歌詞をユニゾンで歌う事により、女声合唱の柔らかな歌声で包み込むように「苦しいことがあっても前を向いて進もう」というメッセージが強く伝わる工夫を成されている。また、⑥友がいる は⑧にも同様の歌詞が出てくるが、1回目に出てくる「友がいる」をユニゾンにすることで、先にユニゾンで歌唱した①、②の歌詞の答えとなるように感じる事が出来る。

2部合唱で始まる⑤からは、G-dur から C-dur へと転調をしている。転調直

前の④の歌詞は「ひとりでくるしむことをやめよう」であり、旋律も徐々に低音へと進行していく。それを立て直すかのように、C-dur へ転調し、⑤の歌詞を2部合唱で奏で、⑥を前述のようにユニゾンにし、⑦、⑧で再び2部合唱で奏でる。このように構成されることで、歌詞のみならずそこで鳴り響く和声によっても合唱するものは転調の効果を感じ取り、それにふさわしい表現で歌唱することが目指せる。

⑪の歌詞が2部合唱になっているのは、その前の歌詞で歌われたことを強調するかのようである。⑭は楽曲最初にユニゾンで奏でた歌詞のアクションとなる歌詞であり、⑫（3拍遅れの2部合唱）でも歌われるが、楽曲終盤で奏でられる歌詞として作詞者が強く伝えたかったメッセージがこもっている行であることが強調される構成となっている。

ソプラノとアルトが1拍、2拍、3拍そして4拍遅れての2部合唱についてみてみると、数拍ずつ言葉がずれながら奏でられることによって、それぞれの言葉が持っている多様な意味やイメージがより深まるようである。またそのことによって聴衆による幅広い解釈も促すことが出来る。

〈もう人間はひとりぼっちでない〉について歌詞を中心に合唱の構成を見てきたが、まとめてみると、ユニゾンで本詩で強く伝えたいメッセージを強調するように歌唱させ、パートからパートへ引き継がれながら2部合唱で奏でることで、坂村が言いたかった、「ありのままに生きていく」——方向に流れるような印象を受けることに成功していると言える。

### 3. 仏教讃歌〈春の仏〉について

#### (1) 作詞者と作曲者について

本楽曲は、詩人・小説家である城左門（じょうさもん、1904-1976）の詩に日本を代表する作曲家の中田喜直（なかだよしなお、1923-2000）が作曲した楽曲で、仏教讃歌としても収録されている。仏教讃歌は、仏教音楽の1つで、西洋音楽の書法に則った明治期以降の作品を言う。

作詞者の城左門は、大正・昭和期の詩人、小説家である。東京の出身で、本名は稲並昌幸という。また、小説家としては、城 昌幸（ジョウマサユキ）という名を使っている。詩人として大正13年「東邦芸術」、「文芸汎論」なども創刊し、「パンテオン」などにも参加した。昭和5年「近世無頼」を刊行、他に「恩寵」やヴィヨンの翻訳詩などがある。作家としては大正14年「その暴風雨」を発表し「殺人姪楽」「死者の殺人」などのほか「若さま待捕物手帖」などの捕物帖がある。その一方で、昭和21年から「宝石」編集長として活躍し、宝石賞をもうけるなど、新人養成につとめた。

作曲者の中田喜直は、日本を代表する作曲家である。出身は東京で1943年(昭和18)東京音楽学校ピアノ科卒業。46年(昭和21)に「新声会」のメンバーになり、本格的な作曲活動を開始した。歌曲、合唱曲、童謡などで日本語を生かした親しみやすいメロディを多く生み、新しい日本の歌の創造に努め、またピアノ曲にも優れた作品が多い。ピアノの鍵盤けんぱんの幅を狭くすることで、ピアノ教育の改革を提唱。主要作品に『ピアノ・ソナタ』、ピアノ組曲『光と影』、歌曲『六つの子供の歌』『雪の降る町を』『夏の思い出おも』、童謡『めだかの学校』『小さい秋みつけた』などがある<sup>7)</sup>。その他、仏教讃歌集にも多くの楽曲が収められている。

本楽曲〈春の仏〉は仏教讃歌集にも収められているが、一般合唱曲としての出版もなされているため、学生たちにとってはより歌唱しやすく、楽曲の理解もしやすいと考えた。

## (2) 歌詞について

本楽曲は、題名に「仏」とあることから仏について、あるいは仏教を背景に持つ楽曲であろうという事が想像できるであろうと考える。そのため、まずは、楽譜内に示される歌詞一ひらがなで示し、各自が詩の意味をより良く考え、歌詞にふさわしい漢字を交えた文章に変更するような【ワーク2】に取り組んだ。

〈春の仏〉歌詞の分析	
<p>歌詞（楽譜内の歌詞－ひらがなで書いておきます）</p> <p>はるのひの ひざしのなかに みほとけのみすがた うかぶ うらうらの ひざしのうちにはるのひの みほとけあはれ</p> <p>はるのひの みずのうらの みすがたの くちぐらとあり とうとくも すずけておはす</p> <p>はるのひのふるみほとけ みなしろず ほりしろしろず ほりみかく みくちのあたり あんじのひの えみにほころび</p> <p>はるのひのみほとけなれば わがいえの みほとけなれば わがにわのはなまいらせん いろうすく かおりはなけれど</p> <p>はるのひの ひざしのなかに みほとけのみすがた たたす くちぐらとすずけてたす はるのひの みほとけあはれ</p>	<p>歌詞の分析に挑戦しよう！</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 歌詞を漢字に置き換えて意味を考えてみよう。</li> <li>2) 歌っているときに意味が分かりやすいように漢字をあ ま漢語に書き込もう。</li> <li>3) 〈もう人間はひとりぼっちではないで行ったような合 唱構成を分析しよう。〉</li> <li>4) 自分なりの解釈を試みよう。</li> <li>5) 歌唱に自分の解釈を活かして表現しよう。</li> </ol>

【ワーク 2】〈春の仏〉歌詞（ひらがな）

【ワーク 2】内 1)、2) によって履修生たちは、作詞者が意図的に「仏」という言葉を使っていることに気づき、なおかつそれがどのような「仏」でどのような場面を表しているのかを自分なりに想像し得ることが出来た。

ワーク 4) で自分なりの解釈では、次のような意見が見られた。

- ・ 春らしい曲
- ・ 転調では、前向きな気持ちの表れを歌っているのではないか
- ・ 厳かな曲だと思うので静かに美しく歌いたい
- ・ 母音の明るさが際立つ曲
- ・ 仏 = 親鸞聖人ではないかと思った
- ・ 仏の描写の仕方が詩にマッチしていると思う
- ・ 春を祝う曲（春は花祭りや降誕会があるので）
- ・ 歌に色彩を感じる（黄色・黄緑など暖色が合う）
- ・ 仏教の良さを広める曲だと感じる（仏様に日が当たりきれいで趣深い雰囲気  
を歌っていると思うので）
- ・ 人々が仏に対して祈りを捧げている様子を歌った曲だと思う
- ・ 春風 = 仏の声なのではないかと思う

- ・ 仏と出会った一人の人間を優しく包み込むような春のあたたかさが描かれている曲
- ・ 日々の感謝やこれからの安心した生活を願う曲だと思う
- ・ 仏はだれにも知られなくとも優しく朗らかに包みこんでくれていることを知らせている曲

などの意見が出され、履修生たちが歌詞や楽曲と真摯に向き合って、ワークを進めたことが良くわかり、それらがいかに実技—合唱することへつながっていくのかを期待できた。

《春の仏》歌詞の分析	
歌詞【東福内の歌詞—ひらがな】	漢字を交えた歌詞
はるのひの ひざしのなかに みほとけのみすがた うらぶ うららの ひざしのうちに はるのひの みほとけあはれ	春の日の ひざしのなかに み仏の み姿 浮かぶ うららの ひざしのなかに 春の日の み顔 あはれ
はるのひの みずしのうちの みすがたの くちぐらとあり とくとも すずけておはす	春の日の 御静子の懐の み姿の 奥々となり 静くも 涼けて居す
はるのひのふるきみほとけ みなしうず ほりもしらぬ ほりみかく みくちのあたり あんじひの えみにほころび	春の日の ふきみ仏、み名知らず 別静も知らず 別深く み顔のあたり おん慈悲の笑にほころび
はるのひのみほとけなれば わがいえの みほとけなれば わがにわのはなまいらせん いらうすく かおひはなけれど	春の日の み仏なれば わが家の み仏なれば わが庭の 花夢らせん 色薄く 露はなけれど
はるのひの ひざしのなかに みほとけのみすがた たたす くちぐらとすずけてたす はるのひの みほとけあはれ	春の日の ひざしのなかに み仏の み姿 立たす 奥々と涼けて立たす 春の日の み仏 あはれ

【ワーク 3】 漢字を交えた歌詞

その後は【ワーク 3】を用いた。学生たちの意見からは、「ひらがなだけで意味が分からなかったが、漢字で表記されたことによって、わからなかった意味が明確になった」「春の仏、はどんなところにいらっしゃるかわからなかったけれど、漢字交じりの歌詞を見るとかなり明らかになって、清らかな気持ちになった」など聞かれ、ひらがなだけでは不明であった言葉一つひとつに目を向け、さらに歌詞を読みこむことで自分なりであっても歌詞の解釈をする力を養うことが出来たことが分かった。

歌詞の内容を理解したところで、【ワーク 4】のように合唱曲の構成を考え

る事で、実際に合唱の授業が対面で行えるようになったときに、自分なりに楽曲のイメージを持って歌唱出来るようになると思った。

〈春の仏〉歌詞と合唱の構成	
漢字を文えた歌詞	楽曲との構成を導く (編訳解説)
①春の日の 日さしのなかに みらの み姿 浮かぶ	①アカペラ
②うらうらの 日さしのなかに 春の日の み姿 あはれ	②3部→4部合唱
③春の日の 御前子の煙の み姿の	③3部合唱(メソ→8拍置かれソプラノ・アルト)
④黒々とあり 尊くも 輝けて暁す	④3部合唱
⑤春の日の 古きみ仏 名も知らず 姿形も知らず	⑤【転調:二重調 (a=ma)→二重調 (D=da)・変拍子:4/4→3/4】
⑥刻深く み露のあたり おん懸想の鏡にほころび	2部→3部合唱
⑦春の日の み仏なれば わが春の み仏なれば	⑥3部合唱
⑧わが魂の 花夢らせん 色薄く 香はなけれど	⑦3部→4部合唱
⑨春の日の 日さしのなかに みらの み姿 立たす	⑧4部→3部合唱
⑩黒々と輝けて立たす 春の日の	⑨【転調:四重調:二重調 (a=ma)→二重調 (da=ma)】3部合唱
⑪み仏 あはれ	⑩3部合唱
	⑪4部合唱→2部合唱 (一部ソプラノとメソユニゾン) →3部合唱

【ワーク 4】〈春の仏〉歌詞と合唱の構成

本ワーク後、履修生の感想には、「これまでたくさん音楽をやってきて、楽譜もいっぱい見てきたけれど、こんなに何度も楽譜をじっくり見たことがなかった」、「合唱曲について構成をこんな風に考えたことがなかったので新鮮でした」など、普段自分がどのように楽譜と向き合っているかを今一度考える良い機会になったようである。

その後、予防対策を十分に行った上で、対面授業を行った後に書いた履修生の感想には、「〈春の仏〉は本当は難しい楽曲だと思うが、事前ワークを十分にやっていたので、早く歌いたいという気持ちが強くなった気がする」、「ワークをする前に演奏したときと、ワークをした後の演奏が違い過ぎてびっくりした。歌詞を知って大切なんだと気がついた」、「正直ワークは何でこんな基本的なことを質問するんだろう…と思ってとても面倒でした。でもワーク後に音を出したときは、感動で涙が出そうになった」など、実技が出来ない不満を抱えた中であっても、一生懸命にワークを進めたことで、合唱をするために必要な情報や考え方を身につけることが出来た。



### (3) 楽曲分析

言語：日本語

形態：女声3部合唱（ソプラノ・メゾソプラノ・アルト）時折4部合唱

速度：心をこめて、あたたかい気持ちで ♩ = 76ぐらい

僅かにテンポ早めて

拍子：4/4拍子⇒3/4拍子⇒4/4拍子

調性：d-moll（ニ短調）47小節まで⇒D-dur（ニ長調）48小節から74小節まで⇒d-moll（ニ短調）75小節から78小節⇒dis-moll（嬰ニ短調）79小節から終曲

本楽曲は、d-moll（ニ短調）の主和音が順に分散され上行する形で始まる。8小節の前奏の中に同様の形が実に3回も表れ、9小節目で3部合唱のアカペラが主和音で始まる。前奏と同じ長さの8小節をアカペラで歌い上げることによって、本楽曲の厳かな雰囲気の中にひとすじの光を見るかのような世界へと聴いているものを誘う。これはまさに、人間を超えた存在や宗教的な真理に対する「主体的な信の育み」つまり音楽を通して、宗教的な情操教育を促し、自身の内面を見つめなおし深めていくことへとつながっていくような和声感である。17小節からは3部合唱に伴奏もつき、たっぷりとも仏の尊さを歌い上げる。26小節から28小節には短いピアノだけで奏でる間奏を挟むことで、d-moll（ニ短調）の世界観で厳かな雰囲気を深め、さらに29小節からは、メゾ・ソプラノからアルトとソプラノが2小節遅れて入り、その後2小節遅れて3部合唱で奏でることで、仏へと春の明るい日差しがあらゆる方向から差し込み、そのみ姿を捉えているかのような演出がなされる。42小節から47小節は、これまで奏でてきた前奏や間奏と同様の主和音が順に分散され上行する形が奏でられた後は、主和音を分散しない形が表れ、違う場面が現れることを示唆している。展開部である48小節から74小節は、D-dur（ニ長調）へ転調し、一部変拍子を含みながら3/4拍子感を確立していく。71小節から74小節はソプラノとメゾ・ソプ

ラノが「Hum.」（ハミング）が歌唱することによって、展開部で歌唱された歌詞の内容を噛みしめるかの様である。75小節から78小節は d-moll（二短調）へと戻り、音の進行も前奏と同様の旋律が4小節奏でられ、79小節から dis-moll（嬰二短調）へと転調している。転調してからは2小節ほどアカペラで奏でられることにより、同様の旋律が曲中に3度出てくるが、1度目は8小節のアカペラ、2度目は伴奏がついた3部合唱、展開部を挟み、3度目は最初の2小節のアカペラに続き次の6小節は伴奏がついた3部合唱となる。3度目は1度目と2度目のあり方を絶妙に組み合わせた形で終曲となっている。

本楽曲はいわゆる有節歌曲<sup>8)</sup>であるが、単なる繰り返しと感じさせない工夫がここには隠されている変化有節形式<sup>9)</sup>をとっている。

#### 4. オンデマンド課題と対面授業について

##### (1) 視覚と聴覚を使った課題のねらい

ここまで、本授業で扱った2つの楽曲についてそれぞれ楽曲の紹介などを行ってきた。これらは前述のようにいずれも仏教を背景に持つ楽曲であり、これまで合唱で活動してきた履修生たちにとっても歌い慣れていない楽曲である。そのため、次のように視覚と聴覚から訴えられる課題を出し、より深く理解して歌唱出来るように実践をした。

まず視覚を使う課題として、パワーポイントを使用した学修を用意した。歌唱自体は視覚化することは不可能であるため、歌詞を視覚化し分析するために既に述べたように履修生が歌詞と向き合う事が出来ることをねらいとし課題を作成した。

次に聴覚を使う課題としては、合唱の授業でありながら十分に声を合わせて歌ったり、声が合わさる感覚を体験できない事から、音源を使用した教材を用意することで、自主練習時にも不十分ながらも「声を合わせる経験」が出来ることをねらいとした。

聴覚を使う課題は、以下に示すような複数の形態を用いることで、より一層

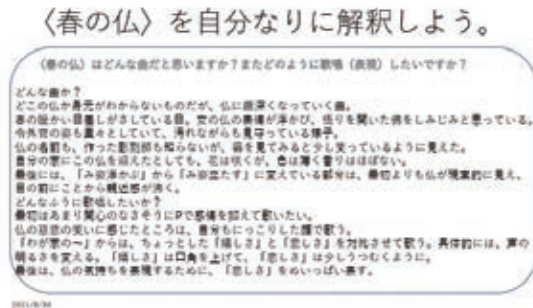
歌詞と楽曲への理解が深まると考え用意をした。

①TAが各パートを独唱で録音した音源、②各パート（ソプラノ・メゾソプラノ・アルト）対面授業が出来た時歌唱した音源、③少人数（各パート4～5名ずつ）で対面授業が出来た時の音源を各回の教材として誰もがすぐに聴きながら自主的に練習が出来るような環境を作った。そのことで、授業に出ることが出来ない履修生（通学不安や体調不良で休まざるを得ない履修生）にとっては、音源に「合わせて」歌唱することが出来る。一方、対面授業に出て来れた履修生にとっては、練習をした後に録音時間を設けることで、授業でありながら毎回本番のような緊張感に包まれ、実技科目として大変有意義であった。

## （2）課題に対する分析と考察

視覚化した教材の中でも、履修生たちが回を重ねるごとにどのように楽曲を捉え、向き合ったかを第4回、第5回授業課題で提出された課題原文などを用いて解説していきたい。

学生たちが書いた〈春の仏〉の歌詞解釈（以下課題原文のまま掲載）



（学生1.）歌詞から内容を読み取り、音楽から背景や表現を読み取った

本文章からは、詩について例えば、「どこの仏か身元がわからない」、や「女の仏」など場面を具体的に想像しながら解釈していることが良くわかる。また、

表現については、詩中から感じる感情を名詞の形（嬉しさ・悲しさ）にすることで具体的な歌唱表現が出来るように考えたことが良くわかる。

### 《春の仏》を自分なりに解釈しよう。

《春の仏》はどんな曲だと思えますか？またどのように歌唱（表現）したいですか？

ここで出てくる仏は親鸞聖人ことではないかと思いました。春には花まつりや縁起会などあるのでその時に親鸞聖人が地上に降ってきたので賢聖部分は神聖的な音で親鸞聖人の氣場を表現し、最後ははじめとほとんど似たようなメロディーで親鸞聖人が遠えていくような感じがしました。（ヒーローやウルトラマンのような男子漢な立場ではなく、笑からゆっくり静かに帰ってくるイメージです）  
途中の堂前子のところは誰も変わらなくて静かになり、今まで4拍子で動いていたのが3拍子になって動きも出るので変わるように《春の風をイメージする》  
最後のエピソードはヒーローを助かせるようなので各パートもしっかり聞きながら歌う。言葉のよい曲ではないので振り回すようにする。  
15小節目と16小節目のように同じことを繰り返すときは流石のようなイメージを持って二重奏をすこし替える。

2021/9/30

（学生2.）仏を親鸞聖人と考えた

本文章からは、（学生1.）よりもっと仏に関して具体化し、自分で理解がしやすいような例えを用いて楽曲を表現しようをしている様子が思い浮かぶようである。また表現についても詩の理解同様に、「春の風」、「波紋」などの言葉を出すなど具体的に考えたことが良くわかる。

### 《春の仏》を自分なりに解釈しよう。

《春の仏》はどんな曲だと思えますか？またどのように歌唱（表現）したいですか？

・文の始めが「春の日の」から始まっていて、仏という言葉は最初からは出てこない。なので、仏に対する情報を少しずつ加えながら周りの景色や状態などを描くことで仏を表現しているのかなと思いました。

・47小節目までは調も同じで仏が目に見えかぶような描写がなされているので、自分自身でイメージを持ちながら歌い、48小節目～74小節目までは拍子の変化や音のダイナミクスを各パートよく聞くようにし、79小節目からは転調も意識して、終のハーモニーを大切にしたいです。

2021/9/30

（学生3.）歌詞の中での「仏」について考えた

本文章からは、歌詞の中で「仏」がどのように言葉として表れ、描写されて

いくのかを考えたものである。本楽曲は、題名にこそ〈春の仏〉と「仏」という文字があるが、歌が始まって5小節目にようやく「みほとけの〜」という歌詞が出てくる。このことによって、「仏」が出てくるまでの8小節の前奏と歌(アカペラ)で聴いている者にそれぞれ想像をする時間を与えているが、そのことを正確に読み取れていると言える。学生3.は歌詞を「詩」として読み取るだけでなく、楽曲の流れも同時に感じながら表現について書かれたことが良くわかる。



(学生4.) 「仏」について具体的に述べた

本文章は、歌詞の中で描かれている「仏」について具体的にどのような姿をしているのか、どのような情景の中にいらっしゃるのかを書いたものである。また表現については、歌詞の世界観を表すべく、調性から感じられる和声感をいかに歌唱出来るかを検討したものである。

## 〈春の仏〉を自分なりに解釈しよう。

〈春の仏〉はどんな曲だと思えますか？またどのように歌唱（楽器）したいですか？

春の仏にかいた言葉が我が家の御仏を頼らし、その様子が神秘的で静く、御仏をよはれむ  
気持ちを表していると思えます。  
この曲の特徴として、音程的關係では、ある音から一音下がって、元の音に戻ってくるものが多いと感じました。例えば、**ま**と**い**の二音下りである**レ**、**シ**、**ソ**という音の配列で、そこから一音上り下りしたあと、もう一音上り戻ってくるというものです。また、**ラ**と**ド**といった、**1**音、**3**音、**5**音といった音階列のものも多いと感じました。この二つの特徴が、仏教曲らしさを表していると思えます。だから、その音程には特に気を付けて歌いたいです。敬語的敬語では、通っかけと同じになることを覚えることによって、複雑したい歌詞がより伝わるようにしているのが特徴的だと感じました。自身のパートと他のパートはどういう関係性でどのように曲が進んでいるのかに注目し、周りの音をよく聞きながら歌いたいです。  
また、音程はしっかりつらなければならないけれど、柔らかく静くまで静く静く歌い、御仏をよはれむ気持ちを表現したいです。

2021/4/28

（学生 5.）歌詞の世界観を音楽的要素と照らし合わせた

本文章は、自身の歌詞に対する解釈と音楽的な解釈とを融合した形で書かれている。歌詞に対して作曲者がどのような形で「音」にして表現しているかを鋭く捉えている。音楽的な音程に対してどのような歌詞が付されているかという事にも目を向けて、それらをいかに表現すべきかを検討出来ている。

以上のように履修生から5名それぞれの解釈を紹介、解説した。

先の例に挙げたように【ワーク 2.】で第一印象に近い形で歌詞・楽曲の解釈を行った際にもかなり本楽曲の主軸となるキーワードを引き出せていたが、【ワーク 4.】に進むと、キーワードに対してどのような音の進行があり、それらをどのように表現していきたいかを歌詞および楽譜を良く見ることによって導き出すことが出来た。本来ならば、歌唱し、いわゆる「合唱」をしながら少しずつ感じて表現方法を見出していくのだが、コロナ禍で可能なあり方を探る良い機会となった。

その後、第15回目の合唱発表会に載せるための曲目解説を書く課題（発表会時演奏予定の5曲から自己選択で1曲書く課題）を第12回に出し、以下のように、3名が〈春の仏〉を選択し解説文を提出した。（課題文ママ）

## 〈春の仏〉解説

### 【学生1】

命芽吹く春の日。あたたかな日差しの中、浮かぶはみ仏の姿。この曲はアカペラで始まり、2度の転調を経て次第に盛り上がっていきます。繰り返される“あはれ”という歌詞には、「しみじみと湧き上がる気持ち」や「深い趣」、「ああ」という感動の意味があります。み仏に出会った驚きが、ご様子がくっきりと浮かび上がるにつれて、喜びへと変化していきます。仏教讃歌には仏教用語が少なく、仏教に詳しい方もそうでない方も楽しんでいただける曲です。暑い季節ですが、春の日差しの気持ちよさを思い出して聞いてください。

### 【学生2】

「春の仏」は私たちが京都女子大学に入学して初めて合唱の時間に歌った曲です。だからとても思い入れがあり、皆さんに紹介したいなと思いました。仏教の建学の精神に基づいた京都女子大学に入学した自覚を持つことができる曲が春の仏だと思います。新型コロナウイルスによりなかなか気持ちが落ち着かないこともありますが、春の仏を歌うと、気をしっかり持つことができると思います。とてもいい曲なので皆さんぜひ来てください。

### 【学生3】

この曲は仏教讃歌の曲集の一曲で、楽曲全体を通して荘厳な雰囲気、女声合唱ならではの透き通った響きを生かせる作品です。ところどころアカペラになる箇所や、4声部に分かれる箇所もあります。中間部分で詩に合わせるように3/4と4/4の変拍子が現れる辺りも聴きどころです。冒頭で二短調だった旋律が最後に嬰二短調に移調して再び現れ、より神秘的さを増して音楽は閉じられます。アルトパートの視点から、時々アルトが低音域で復唱する箇所がこの曲に少しアクセントを加えているのでそこに注目していただけましたら嬉しいです。

コロナ禍で通常の「合唱」で行われるような、声を合わせて歌唱しながら学んでいくということが簡単には行えない中での授業の進行であったため、「今

できること」を探して一つずつ課題を乗り越えていった。1つの楽曲につき、数回ずつではあるが、いつもと違った角度で視覚と聴覚を使った課題を行った。このことによって、履修生それぞれが楽曲といかに向き合うべきか考え、深める良い機会を得、今後の学習へつなげていくものと考えている。

## 5. まとめ

仏教讃歌の合唱指導について、どのような方法で履修生個々の心を育みながら表現力を引き出していけるか模索してきた。

まず、履修生各自が歌詞をしっかりと読み、楽譜を隅々まできちんと読み取れることを学べるように視覚や聴覚を使った課題を出すことで、無意識であっても、それらの大切さに気づき、これまで行ってきた「楽譜を読む」行為について意識的に考え、正確に捉えることが出来るようにカリキュラムを組み実行した。このことによって課題を重ねる度に履修生の視野が広がり、歌詞や楽譜についてこれまでの知識を総動員して追求していく様子を読み取れた。これまで無意識に楽譜をみて練習してきたことを各自が気づくことでその後の歌唱表現に及ぼす影響は大きいことが分かった。

しかしながら、実技の本来的な練習である、①歌唱しながらハーモニーを耳で確認する②歌唱しながら楽曲構成を身体で感じる③歌唱しながら進めることで、五感を使った演奏へ変化する④五感を使って感じたことを視覚化したり言語化したりする活動は本来省くことの出来ない重要な活動であり、すべてバランス良く進められることでさらに素晴らしい演奏も可能になると考える。

授業後の授業アンケートなどを総合的にみても、皆で集まって歌唱出来なかったことを嘆く意見は少なく、むしろ課題に対して、「こんな学び方があるんだと大発見できた」など前向きな意見が多かった。

出された課題に対して「簡単だ」と感じた学生も少なからずいる一方「難しい」と感じた学生が混ざり合っていたため、課題の難易度設定をいかにすべきかとの難しさも同時に感じた。



本論での試みでは、宗教と教育の関わりを深く考えられるような時間を取ったり、学生同士で意見交換が出来るような場を用意したりできなかったため、今後さらに研究を深め、より良い授業内容構成を考えたい。また、履修生が指導者になった時に、各自が確立し、自ら発展させて行けるようなプログラムの更なる研究に加え、現代社会に生き残っていきけるようなより良いカリキュラムの構築を目指したい。

註)

- 1) 『子どもたちの未来と教育メディア』宇治橋祐之（NHK 放送文化研究所）、小平さち子（NHK 放送文化研究所）Studies of Broadcasting and Media に詳しい。
- 2) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/media/06112105/009.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/media/06112105/009.htm)（2020年8月6日）2021年8月4日閲覧
- 3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成22年）：『特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）』pp. 174-184歌唱実技 表現の工夫を活かした歌唱に詳しい。同 pp. 219-224生徒質問紙調査における調査結果に詳しい。
- 4) <http://www.zenseikyo.or.jp/manabou/yomimono/> 2021年8月4日閲覧  
公益財団法人全国青少年教化協議会 子ども支援ネットワーク内記事参照。
- 5) 坂村真民『自選坂村真民詩集』致知出版社 平成28年12月11日第一刷 p. 95  
念ずれば花ひらく、180なにかわたしにでもできることはないか、214二度とない人生だから 他、自費限定版の詩集12冊に加え、未刊の作品から真民氏自らが選んだ名詩305篇を収録されている。
- 6) 同上書 p. 6
- 7) 『中田喜直著『随筆集 音楽と人生』（1994・音楽之友社）』
- 8) 有節歌曲とは、詩の各節ごとに、第1節につけられた旋律をそのまま繰り返す歌曲の事を言う。比較的単純な抒情詩に多く見られる。
- 9) 変化有節形式とは、有節歌曲（形式）の1つで、詩節の内容に合わせて音楽が部分的に変化する有節形式を言う。

参考文献

- ・ 出典 講談社デジタル版 日本人名大辞典  
<https://kotobank.jp/word/%E5%9F%8E%E5%B7%A6%E9%96%80-1082233>  
2021年8月26日閲覧

<キーワード>

仏教讃歌 合唱指導